



No.27 (通No.106) 2021年11月7日

てつがく なかにわ

LEE'S レター 哲樂の中庭 2021年立冬

仕事をこえて、さまざまに考えをめぐらせ、それをまた仕事にいかすアプローチ

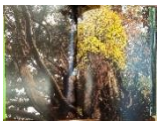
むかしも今も、分野もこえて、「観察」のすすめ

ホスピタルアート

秋は行事やイベントの多い季節、特にアート系は満載。『ホスピタルアート in ギャラリーⅢ』(11/10-11/21)もその一つです。
<https://www.enkojima-art.jp/event/7189/>

医療現場にアートの可能性を問うホスピタルアート、発祥はスウェーデンだそうで、今では多様なアプローチが展開されているようです。日本ではようやく「導入期」でしょうか。

ホスピタル、ホスピタリティ。企業のオフィスにもアートの和みが増している。それには程遠いですが、知人にもらった『屋久島写真集』を開いて、少し目を和ませています。



拠点ゼミ vol.3

毎年この時期になると同じことを話して書いています。11月にもなると、来る年の自分になる兆しを捉えられるはずですよ、と。

それが「女性チャレンジ応援拠点」の『拠点ゼミ』第3弾のテーマになりました。12月は師走、11月中に来年の「計」について頭を巡らすのも一考です。

<https://danjo.osaka.jp/challengekyoten/event.html>

* 念のため、受講対象は女性のみ

LEE'S (リーズ)



〒541-0046

大阪市中央区平野町1-7-1

堺筋高橋ビル5F Tel. 06-7160-0937

大阪 NPO センター RS B507

リー・ヤマネ・清実

Lee Yamane Kiyomi

「観察」をあらためて辞書で調べると、「物事の状態や成り行きなどを注意して見守ること、ある現象や物事があるがまま詳しく見て理解すること」。

約500年前の「モンテーニュ」は『エッセー』の中で、次のように言っています。

「ひとりひとりの人間は、もし自分をこまかく観察する能力を持っているならば、自分自身にとってひじょうによい教育材料になる」(『モンテーニュ』荒木昭太郎 中公新書)

この一節は LEE'S の Web トップページにも載せています。日常生活の中で、直感する何か、または心の動き、想起すること、など等。些細な変化にも、うん?と、注目してみる。

「何?なぜ?」と自分に問いかけ、内に外に、矛先をむけて、頭を巡らす。そのプロセスからまた先に何かしら考えがわく。そう考えると、たしかに「よい教育材料」なるなあと感じます。

| 見聞感考 | 手紙を書く、書かない、書いてみれば…

今や、特に若い人には「希少習慣」といえる「手紙を書く」。それでも書く人は書いています。仕事で出会った20代半ばの男性がそうでした。「他の人があまりやってなさそうで、自分のやっている習慣ってありますか?」と尋ねたら、少し考えて「手紙…ですね。友だちの誕生日に手紙を送ったら、すごく喜ばれたとか。

珍しくなった分、妙味も増すもので、そんなことを夏に話す機会があり、文書にしました。以下のリンクの「手紙の妙味」です、ご参考まで。
<https://www.leeslee.com/20210802LetterLYK.pdf>

さて、手紙を書く習慣のない人が「手紙の妙味」に刺激され、「雲の上の人」に手紙を出したという人がいます。著書に感銘を受け、学外での社会的なつながりにも共感して、師と仰ってきたそう

『自然は導く』(ハルト・キャディ みすず書房)でも、1903年生まれの著者が次のように書いています。

「偉大な芸術家、ナチュラリスト、科学者、航海者、探検家、詩人、開拓者たちには一つの共通点がある。小さな観察からこの世を生きる人たちに創造的なものをもたらす能力がある。小さなことに目を向ける能力は、のちに驚くほど重要になり、深い意味をもつ」。

夏至レターで「心」を体系的に誰でも学ぶ必要があると書いたので、『心のしくみとはたらき図鑑』(創元社)を買って勉強してみたら、心をとくに「観察」が大事なアプローチと知りました。

よく引用する数学者の言葉、「最も貴重な情報は、流れの変化にある」も、「観察」あってその変化に気づくというものです。五感を澄まして、「観察」を利かせて、いよいよ「ポストコロナ元年」、くる年2022年を、受けて起ちましょう!

ですが、想いを伝えるのに、「手紙」の発想はまったくなかったそうです。

時間をかけて文を考え、何度も見直し、同封物もきれいに整えて、よしこれで!と思い切って出した。すると丁寧な返訪届き、さらに勉強会へも声をこけられ、直に、密に話さされた。「まさかこういう展開になるうとは…」と大感謝のこ本人。

『美しい痕跡』という本の中で、カリグラファターの著者は手書きの手紙について、「送り主が受け取り主のためにする、一つの創作活動」と書いていました。なるほど、それは言える。そういう目でみると、「手紙の妙味」も増します。

手紙を書こうと思い立った時から投函するまでの独りの世界、ある意味「オロロカえる」時間、けっきよ自分のためにもなる、いい時間です。